

## 産学交流シンポジウム

### ■まとめ

産学交流シンポジウムを実行してみて感じたこと。  
今回の企画は、多くの企業や多くのデザイナーが会員となっているテキスタイルデザイン協会ならではの企画であったこと。学生達もこのように多くのデザイナーのなまの声とアドバイスをとても必要としている事実を強く感じた。  
手探りで企画した今回の産学交流シンポジウムは、手前味噌で評価するならば、まことに有意義であり成功であったと思う。次回は企画段階から教育スタッフを増強し相談役講師との連携を密にし、また賛助会員も呼びかけ、実行時期の調整も充分行い、懇談会の時間も考慮して続けて行けたらと考える。

(レポート 松本美保子)



—21世紀のデザイン教育— 懇談会風景

## 産地支援テキスタイルネットワーク

産地のテキスタイル生産者を支援するテキスタイル・ネットワークの活動が、5年を迎えた。

産地において、ユニークな物作りをしている生産者の自助努力を支援する、のがテキスタイル・ネットワークの活動である。

この活動は、大阪のWFTF'96(ワールド・ファッション・トレード・フェア)を機に始まった。本年で5年目になる。

活動は次の4つである。

- ① T・N展の開催 ② T・N交流会の開催
- ③ T・N産地研究会の現場での開催 ④ T・Nニュースの発行

### ㉑T・N展

WFTF'96を機に、大阪、東京で定期開催している。今年6月の、東京・青山展で8回目となる。

このT・N展は、大げさなイベントではなく、商談の場として、アパレルメーカー、小売業者、商社などのバイヤーが、約1500名が訪れた。('99年東京・大阪展)

出展者も来場者も回を得て催されているのではない。出展者の自費による参加費でまかなわれている。その出展費は、1ブース、什器付き、宣伝費込みで、5万、10万円と格安だ。年会費は無用で、参加も不参加も自由である。したがって、運営の仕方いかんが、常に問われることになる。

成功要因は、①自費で出展する企業のみ参加、②商談成功を自助努力の成果とする姿勢、③バイヤーの来場に的を絞った

### ㉒T・N交流会

今治、広島、泉州、京都、高島、福井、新潟、尾州、有松鳴海、浜松、八王子、村上、所沢、富士吉田、桐生、足利、長野、米沢、神戸、東京などの産地において、ユニークな物作りをしていながら、新しいビジネスチャンスを求めている生産者が、年2回、自社製品・商品を持ち寄り、公開し、情報と意見を交換する場である。'99年までに7回開催した。

成功要因は、①「当社でなければ」の自負をもった企業だけの集まり、②互いに刺激し合い、③異産地間協力の事例が生まれた。

### ㉓T・N産地研究会

有松鳴海、津島、今治、岡谷の産地で、自己開発を求めて自助努力している企業経営者たちと、膝をつきつけての研究会を催してきた。

そこでのテーマは、①待ちの姿勢から仕掛ける姿勢への変身の仕方(問屋機能の負担)、②商品開発の仕方(消費者としての客をみる習慣づくり)、ボディ感の開発の仕方、他産地技術との複合、織機の操作、能力活用、織機の独自開発、糸質・糸づかい、仕上加工の活用など、③エージェント制の採用、④ファクトリーブランドの確立にもけてすべきことなどであった。

### ㉔T・Nニュースの発行

'99年度に2回発行。在庫ゼロの好評だった。

このような活動のなかから、内外での自販を確立した生産者が、複数、出てきた。

'99年、中小企業総合事業団から「コーディネート活動支援事業」として、テキスタイルネットワークの活動は認定された。繊維分野では唯一である。空理空論に陥らず、イベント騒ぎをしない、地道な積み重ねが評価されたのだろう。

テキスタイルネットワークの運営は、次の4人で行われている。

宮本英治(みやしん) 松尾武幸(FB総研) 長田和之(サンカム) 野末和志(企画屋えぬ)

ただし、ビジネスとして行っているわけではない。

日本のテキスタイル産地の活性化に、熱き思いを抱いているが故に行っている。

この活動は、(社)トータルファッション協会(ATF)、石原修氏の強力な声援によるところ大である。

むろん、活動に参加してくれる生産者の賛同あつてのことである。参加する生産者の多くが、海外マーケティングを望んでいる。これをどのように実現させられるか、これが、4人に課せられているテーマである。

(レポート 野末和志)

